スペイン語圏を知る本（その31）

斎藤慶一郎著

『カナリア諸島　たびたびの旅』

東洋出版 2003

評者　坂東省次

スペインはイベリア半島、バレアレス諸島とカナリア諸島の二つの諸島それに二つの飛び地セウタとメリーリャからなる。このうちカナリア諸島は半島から1,100キロも南下した大西洋上のモロッコ沖に位置している。スペインを訪れる日本人観光客は毎年かなりの数になるが（年間30万から40万か）、カナリア諸島まで足を延ばす人となると少ないだろう。

このカナリア諸島にあるラス・パルマス日本人学校にスペインもスペイン語も知らない一人の日本人教師が奥さんと赴任して、1995年4月9日から1998年3月24日までの1,081日間を過ごした。本書はその体験記であるが、日本人がカナリア諸島について書いた最初の本でもある。

本書によれば日本人学校は世界約60ヵ国に90校ほどあり、その内スペインにはマドリード、バルセロナそしてカナリア諸島のラス・パルマスの3ケ所にある。マドリードとバルセロナはわかるが、なぜラス・パルマスにと疑問を持つ方には、カナリア諸島がかつて日本の遠洋漁業の基地であったと言えば納得されるかも知れない。驚くなかれ、ラス・パルマス日本人学校はマドリードやバルセロナより古いのである。「1960年代当初、北西アフリカ沖にタコ、イカ、タイ、マグロなどの好漁場が発見された。日本トロール船はこぞってこの遙かなる海を目指した。ラス・パルマスは、その漁場の重要基地として、一躍脚光を浴びることとなった。その勢いに乗って、1973年10月にラス・パルマス日本人学校は開校した。児童生徒数18名、派遣教員2名のスタートだった。」しかし、著者が赴任した当時の生徒数は8名に減っており、著者が帰国したあと同校はついに閉校になったという。

本書は「カナリア諸島での日々」「カナリア諸島への旅」「カナリア諸島との別れ」の全3章からなる。とくに2章の「カナリア諸島への旅」では、旅好きの著者が滞在中に訪れた7つの島の思い出を語ってくれる。「このカナリア諸島には、スペイン本土に勝るとも劣らない見どころがたくさんあった。7つの島それぞれが違った特色を持っており、それぞれが私の旅心をくすぐり、いざなうのであった。こてこての「旅行」に飽きた方には、カナリア諸島の旅を強くお勧めしたい。きっとその旅心を充分に満足させてくれるはずである。」

著者は7つの島を訪れ、それぞれをこんな風に呼んでいる。「海千山千　グラン・カナリア島」「悲しき思い出　テネリフェ島」「愛しのマンリケ　ランサローテ島」「パニック・イン　イエロ島」「人外魔境　ゴメラ島」「青い鳥を求めて　フェルテベントゥーラ島」「欲望の果てに　ラ・パルマ島」どの島が一番美しいのだろうかという質問には、著者はこう答える。「カナリア諸島の海はそれぞれが美しいが、一番はと問われれば、誰が何と言おうともこのフェルテベントゥーラ島であろう。その美しさは筆舌に尽くしがたい。空の青さ澄みきった海、一面純白の砂浜と海底の深浅が微妙に呼応しあって、この世のものとは思えぬ色彩を演出していた。この美しさを伝えるにはどうしたらよいのか。私は途方に暮れた。・・・」

カナリア諸島からたくさんの思い出を胸に帰国した著者を待っていたのは、多忙でゆとりのない生活であった。著者はカナリア諸島の生活と日本の生活を比較しながら、「日本の生活は便利ではあるが幸福ではない」と言い切っている。著者はカナリア諸島に3ヵ年過ごしたことで、2つの異なる文化を比較する眼を身につけた。カナリア諸島では「自ら生きていた」という著者は、日本でも「自ら生きている」ことを実感できる生活を求めてやまない。著者にとって、スペインで過ごした3ヵ年の生活は、自分探しの旅になったと言えよう。

ばんどう　しょうじ（教授・スペイン語学）